寸胴鍋のどてらい男

創業者列伝

創業者の波乱万丈物語

「細川　隆一」

寸胴鍋のどてらい男

創業者列伝

腕にはちょいと自信ある、面倒見のいいその男。破天荒な発想で、世間を渡る、おもろき人生。

「この写真のプロレスラーは?」「はい、うちの創業者です」

三同建設の本社を初めて訪問する人は、エントランスに掲げられたプロレスラーの写真に目が釘付けになるはずだ。それが創業者・細川隆一の若かりし頃と知れば、驚かないわけがない。細川は、数々の伝説をもつ。ありし日の細川と接した人物なら誰でも「細川烈伝」を、いくらでも語れる。

細川隆一は1931年、大阪市住吉区にあった寺の長男として生まれた。幼い頃は真面目な性格で、人一倍きれいな字を書いていたというから、平時であれば住職の道を歩んだかもしれない。

●少年期の細川隆一

ところが戦争を境に、ジェットコースターさながらの紆余曲折が隆一の人生を翻弄する。

「プロレスラーやったら、どついても、怒られへん」

寺は空襲で焼け、母方の実家である山口県に疎開。戦後まもなく、父親の死と寺の売却によって貧困をきわめ、母親は露天商を営んで生計を立てたという。

隆一は山口県の高校を卒業後、鉱山で3年ほど働き、発破技士の資格を取得したが、ワイヤーが足に巻き付くという、新聞に載るほどの事故で大けがを負った。

●越智鉱業時代

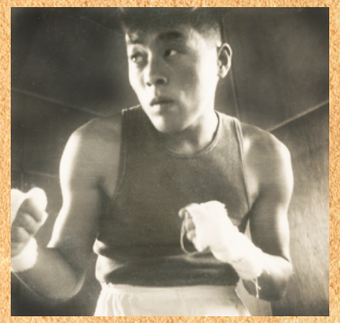
大阪に戻り、プロレスラー山口利夫の門を叩いたのは、20歳を少し過ぎた頃だった。当時プロレスといえば、敗戦で意気消沈していた日本を街頭テレビ中継で元気づけていたシンボルだ。

腕っぷしには自信のあった隆一が「プロレスで一旗あげたい」と考えるのは、自然の成り行きだった。

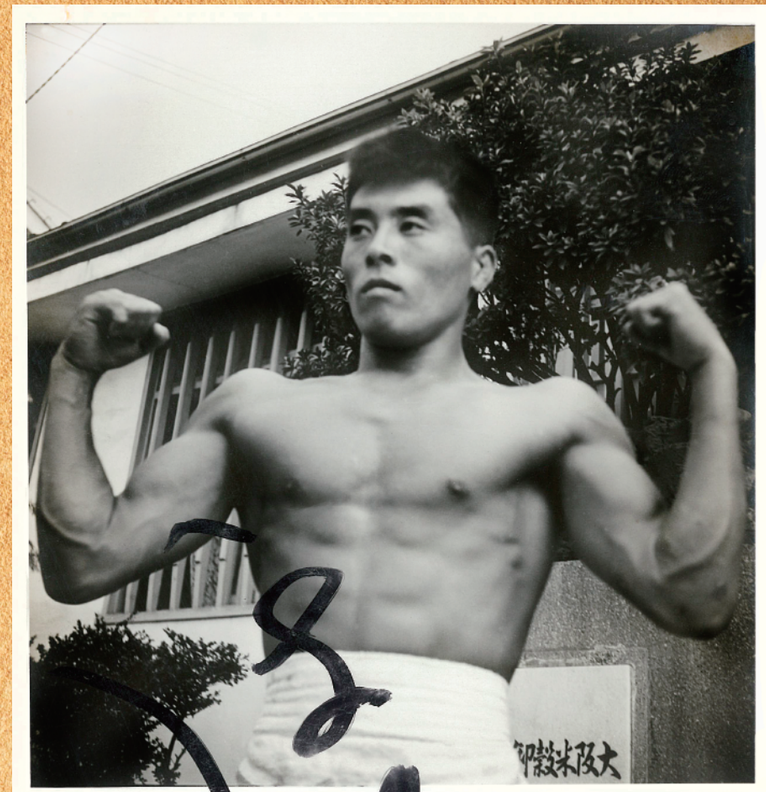
旧・全日本プロレスに所属して「日本人全レスラー名鑑」にも名を連ね「月刊プロレス」の「登録選手一覧表」にも紹介されるまでになった。

「ちょっと、カネ貸して」「食べ放題、いこうや」

当時は外国人レスラーを空手チョップで豪快になぎ倒す力道山が大ブーム。熱狂する観客を前に、隆一も得意の立ち技で、ありあまる体力を惜しみなくぶつけ、観客を湧かせた。当時の先輩に「火の玉小僧」と呼ばれて活躍した吉村道明がいる。



ただしレスラーにはなれても、それだけでは生活できなかった隆一は、パチンコ店の用心棒をしてしのいだ。弟・義隆と仲がよく、持ち金がなくなると弟に金を無心する一方で、金ができるとふたりして道頓堀にある、すきやき食べ放題の店に駆け込むという、起伏の激しい日々だった。※敬称略



寸胴鍋のどてらい男

創業者列伝

やってみようと閃けば、一心不乱、猪突猛進。腹の底にあったのは、「喜んでもろてナンボやろ」。

「興業って、おもろいな 付き合いが増えるしな」

プロレスラー時代の経験は、細川隆一の人生に大きな影響を与える。ケンカが強く面倒見のいい隆一に、この華々しい人気商売は、うってつけだった。まわりから一目置かれ、人望を集めたことで、自らのキャラクターをより強く自覚。また先輩も後輩もみんなで同じ鍋をつつくプロレス時代の食事に「これ、ええな」と感動し、手づくり鍋料理をふるまうことに心血を注ぐ相談役時代の姿勢にもつながった。興業関係者との付き合いが広がり、気遣いの大切さを学んだのも、この頃だろう。

だが、プロレスラーとしての活躍は長く続かなかった。腰を痛めて引退を余儀なくされ、実質は5年ほどだったようだ。

●旧・全日本プロレス時代

「稼げるんちゃう? やってみようや」

20代でプロレスラーを引退してから40代で三同建設を立ち上げるまでの間、さらにその後も、隆一はノンストップで波瀾万丈の人生を繰り広げる。もともと商売のアイデアが次々と浮かぶタイプだったのか、弟・義隆と一緒に傘売りをしたり、白タクで稼いだりしていた時代もあったという。

プロレスを辞めてしばらくは、法律事務所でアルバイトをしていたが、興業の魅力が忘れられない隆一は、自らバンドをプロデュース。おもに和歌山の白浜で観光客を相手に営業した。

特筆すべきは、このバンド活動がきっかけで、生涯の伴侶を得たことだろう。妻・栄子は三同建設の経営そのものに直接関わることはなかったが、朝6:00に出勤する隆一に、毎朝手づくりの弁当を持たせた。ふたりは後継者となる恵吾をもうけ、三同建設の次世代を託すことになる。

「レコード、出すねん。コンサートもするで」

スポーツと興業は、隆一の「人を喜ばせたい」という意欲を常にかき立てた。野球チームを結成したこともあるし、40代に入ってからはシンガーとして「ザ・バッキャローズ」に参加し、レコードデビューを果たす。チャリティーコンサートの開催など「人が喜ぶこと」はすぐに思いついた。

プロレスラー時代の交流は引退後も続き、その闘魂によって、当時大阪のために奔走する、熱い市議ともウマが合ったし、相撲部屋の応援ぶりも半端ではなかった。

このエネルギーは生涯、失速することを知らなかった。

●白浜でのバンド活動

●白浜での野球チーム

●奥様と白浜にて

●ジャイアント馬場とのスナップ

●ザ・バッキャローズ

二、ネオン花仁義
唄：藤本浩一
四、なつメロの花咲けば
唄：神保和彦
五、おんな町ブルース
唄：吉田天二
六、なっているかい幸せに
唄：細川隆一

●ザ・バッキャローズ「12人の演歌野郎狂演」

寸胴鍋のどてらい男

創業者列伝

現場で体を張ってくるメンツを鍋でねぎらって、妥協ない宴会、麻雀で、外部とも固い絆を結ぶ。

「この鍋を一番に食うのは現場から帰るヤツらや」

三同建設を立ち上げた細川隆一の出勤時間は、従業員より早い朝6:30。解体現場にも一番乗りだったという。それだけ熱を入れた社業を、60歳で長男にあっさりと全権委任し、相談役となった。

「おっさんは、なあ」

長男の恵吾（現社長）は、自身が50代になった今も、創業者である父親を「おっさん」と呼ぶ。さらに協力会社の面々に隆一との思い出を尋ねれば「そらもう鍋！ 宴会！ 麻雀！」。誰に対しても「創業者様」などとあがめられるような付き合い方をしなかった証だ。

相談役に退いた隆一は、かねてから宣言していたとおり、経営からきっぱりと離れる。そして最も力を入れたこと、それが職場でふるまう手製の「鍋料理」だ。

自ら市場に足を運び、選び抜いた食材を買い付けて会社に戻り、大きな寸胴鍋で煮込む。これが旨い。内勤社員がうっかり食べようとすると「現場の人間が先や。順番を間違えるな」と、一喝されたという。解体現場で働く人間を、最大限ねぎらいたいという気持ちの表れだったのだろう。ともに働く協力会社の面々もたびたび「おいで、鍋、食わしたる」と誘われ、就業後の三同建設社内は、どんちゃん騒ぎだった。

「大事なお客さんなんや 最上級のおもてなし、頼む」

協力会社を招く懇親旅行を自ら「プロデュース」していたことも伝説と化している。当日までに必ず自分で現地を下見し、細かく打ち合わせをした。

細部にまでこだわり「この土地で食える、一番うまい食材を出してくれ」と、料理長に要求。普段は精進料理を出す旅館にも掛け合って、ゴージャスなメニューに変更させた。コンパニオンを集めて、盛り上がる接待について指導したこともある。「豪快やのに、細かい」と社内外で評判の隆一を、こう振り返る人もいた。

「決して酒が好きなわけやなかった。しかも誰かとふたりで飲みに行ったりはせえへん。みんなの輪をつくるタイプやったんや」

とにかく楽しいことには目がなく、麻雀にも誘いまくった。負け知らずで徹マンも当たり前。春日野部屋の巡業に合流し、力士と一緒にちゃんこ鍋を食べるという懇親旅行も企画した。相撲との縁は深く、栃乃和歌関（現・春日野親方）の断髪式でハサミを入れるほどだったことから実現したのだろう。

●栃乃和歌関（現・春日野親方）断髪式

●柔和な印象の相談役

●旅先での麻雀

●早田さんとの語らい

●労をねぎらう安全衛生協力会

●芸妓衆へのおもてなし指南

寸胴鍋のどてらい男

創業者列伝

仕事とは常に義理人情。若手の動向もチェック。この世を去った今も三同イズム不滅の守護神。

「ベトナム行くから、ちょっと一緒にきて」

細川隆一は、海外にも大きな関心を寄せた。ビジネスチャンスを狙って視察に旅立つことも多く、社員旅行、協力会社を招く懇親旅行にも海外が含まれるようになっていく。ベトナム、タイ、シンガポール、ハワイ、スリランカ、フィリピン…。突然思い立って渡航計画を立てることもしばしばで、アテンド役の社員は、大わらわだったようだ。のちにベトナム、ミャンマーなどから社員を採用することになるのも、隆一が布石を打った成果だといえよう。

●万里の長城にて

●キリマンジャロを背景に

●南アフリカ領事館官邸にて

●マレーシアの屋台にて

「食えよ、しゃべれよ」「おまえは、どう思うねん」

細川隆一は2014年に他界したが、その後も「宴会」は続いている。協力会社と社員が集う「先代を偲ぶ会」が毎年、ホテルの宴会場で催され、会場には巨大な隆一の遺影。眼光鋭く睨みをきかせた風貌は「オレについてこい」が口癖だった隆一らしい。

付き合いの長い協力会社の面々は「なんで、こんなことでけへんねん、おまえらやったら、できるやろ」とハッパをかけられ「できるから仕事ふってるんや」と厳しかったと振り返り「そういう人物やから惹きつけられた」と懐かしむ。「仕事では怒られへんのに麻雀でしくって、えらい怒られた」「私が独立したとき『もうからへんかったら、オレに言うてこい』って、応援してくれた」などと話は尽きない。

社員はこう回想する。「一番よく言われたのは、まわりのみんなと一緒にごはんを食べて、お酒を飲んで、しゃべりや、でした」「営業担当だったころ『仕事、とってきたらしいな』と、先代から声をかけてもらいました。一人ひとり、よう見てはった」

顧客から「掃除も近隣対応も任せて安心や。やっぱり三同建設やな」という反応をもらうたびに、先代が築いてきたものの重要性をかみしめるという社員もいた。

「先代を見習って、私も解体現場のメンバーをねぎらうように意識しています。今日も、全員がスーツ姿で偲ぶ会に参加できるよう、仕事をきっちり15:00 で済ませました」と、ある現場リーダーは頼もしい笑顔を見せた。

仰々しい社是を全員で斉唱するといった経営トップではなかったが、隆一のスピリットは今も、社内外に十分、行き渡っている。あの世で「してやったり」と、目を細めているかもしれない。

●社葬祭壇

●偲ぶ会「乾杯のご発声」

●偲ぶ会「社長からのご挨拶」

●偲ぶ会2020（令和2）年

通達

就業時間中は
上司に対して礼儀
礼節を守ること。

一、言葉使いをわきまえること。

一、ポケットに手を入れたままで上司と受答をしない。

一、上司と仕事に関する話をする時は、必ず面と向って話をする。

一、上司が立って話をしている時、部下は必ず立って話をする事とする。

一、尚、工事打合せ等で座って会話する場合でも上司に着席の了解を得る様努力すること。

右記五項目は厳守すること。

相談役